

低線量CT肺がん検診を受診される方へ

1. 低線量CT肺がん検診の目的について

低線量CT肺がん検診の目的は、肺がんを早期発見することです。

2. 低線量CT肺がん検診のこれまでの成績

低線量CT肺がん検診では、胸部X線検査による肺がん検診と比較して、より小さく、早期の肺がんを発見できることが国内外の研究で報告されています。アメリカ、オランダでの喫煙者を対象とした低線量CT肺がん検診では肺がん死亡率を減らす効果があると報告されています。

3. 低線量CT肺がん検診の方法

CT装置を用いて肺全体を可能な限り被ばく線量を低減させて細かく撮影します。

「肺がんCT検診認定医師」2名にて判定を行います。検診結果は3週間以内に郵送でお知らせいたします。

4. 低線量CT肺がん検診の費用

費用は全額自費です。精密検査が必要と診断された場合は、それ以後の診療には健康保険が適用されます。

5. 低線量CT肺がん検診により期待されるあなたの利益

1) 検診によって肺がんが早期に発見され、早期に治療を受けることで、その肺がんによる死亡を回避でき、また有効な治療を受ける機会が増し、生存期間を延ばすことができる可能性があります。

2) 検診を受けて「異常なし」と判定されれば、ひとまず安心して生活することができます。

6. 低線量CT肺がん検診により起こるかもしれないあなたの不利益

1) 検診の結果が陽性（要精密検査・追加検査）となった場合でも、結果的に肺がんでないこともあります。喫煙する人・喫煙していた人を対象にして低線量CT肺がん検診を行うと、3～6割の人に何らかの“異常な影”が見つかることが報告されています。このうちの90%以上は肺がんではありませんが、“異常な影”の中には肺がんと非常にまぎらわしいものがあり、約1～2割の人は肺がんか否かを診断するために精密検査や定期的な経過観察が必要になります。この場合、「肺がんだったらどうしよう」といった不安を抱くことや、結果として必要の無かった精密検査を受けることになる可能性があります。

2) 肺がんか否かを診断するための精密検査には気管支鏡生検、経皮針生検、胸腔鏡生検がありますが、それに伴う苦痛や合併症が生じる可能性があります。

3) 将来的にあなたの生命に影響を及ぼさないような、発育の非常に遅い肺がんが発見される可能性があります。

4) 低線量CT肺がん検診による放射線被ばく線量は、胸部X線による検診の約10倍ですが、低線量CT肺がん検診を受けて被ばくしたことにより、新たにがんが発生したという報告は今までのところありません。

7. 低線量CT肺がん検診で肺がん以外の疾患が発見される可能性

肺がん以外の呼吸器の疾患（縦隔腫瘍、肺気腫、間質性肺炎、気管支拡張症、抗酸菌症など）や肺以外の臓器の疾患（肝臓疾患、冠動脈壁石灰化、乳房腫瘍、副腎腫瘍、腎腫瘍など）が発見される可能性があります。

8. がん検診全体に関わる重要な事項

1) 検診の結果が異常なしであっても、今後肺がんにならないというわけではありません。

2) 発育の速い肺がんの場合、次回の検診までの間に自覚症状で見つかることもあります。太い気管支に発生する肺門型肺がんや、発育が非常に早い小細胞肺がんなど、低線量CT肺がん検診では発見されにくい種類の肺がんもあります。

3) がん検診では追跡調査を行い、結果については、外部の専門家による審査を受けたり、公表（学会発表、論文化）したりする場合があります。また受診者の方々の個人情報に関しては、守秘義務を遵守し、作業のいかなる段階においても個人名が公表されることはありません。